

広沢寺温泉（県下名勝・史跡四十五佳選）を起点に七沢歴史散策

1. 広沢寺温泉【県下名勝・史跡四十五佳選】の当選記念碑（第37位・38481票）

- (1) 広沢寺温泉は、七沢温泉郷の一つで昭和初期の開湯で、東丹沢大山山塊に囲まれた山間の大沢川沿いに湧き出る強アルカリ温泉である。旅館は、創業昭和9年の玉翠楼一軒のみで付近には温泉名の由来にもなった古刹広沢寺があり、閑静な景勝地である。
- (2) 横浜貿易新報社は、昭和10年に創業45年の記念行事として県下名勝・史跡四十五佳選を読者の投票によって選定する行事を行った。厚木では、唯一、広沢寺温泉が当選した。

2. 広沢寺（山号大富山、曹洞宗）～總寧寺（市川市）末寺

(1) 由緒・歴史〔『新編相模風土記稿』（~~以下略~~）他〕

①創建開創 了庵慧明禅師が応永10年(1403)、庵室（露栢庵）を結び閑居した(67才)。

○了庵慧明〔建武4年(1337)～応永18年(1411)〕、建長寺、円覚寺で修行し、更に能登国総持寺で通幻禅師に師事、応永元年(1394)に大雄山最乗寺を創建(58才)、75才で死去。

○慧明は、伊勢原下糟屋の亀井家（医師）の出身で、若い頃幼馴染みの妙覚道了と高森にある道了尊御本地（松高庵）で一緒に修行したという。二人は最乗寺の創建にも協力した。

②開 山 住僧桂堂原佐〔~~開基~~（~~制~~）~~代~~〕 寛正年間(1460～65)に上杉定正の援助により一寺となる。

開 基 上杉定正（七沢城主） 当寺に深く帰依し、領地の一部を与え保護した。

③中興開山 住僧越翁周超〔~~開基~~（~~代~~）~~代~~〕 寺は一時衰退するが、16世紀に入り越翁が住職の時に中興開基 北条氏綱(1487～1541) 氏綱の下で再興し、大富山広沢寺と改称した。

(2) 本 堂 寺は、3回(永・延・安・享)火災に遭い、現本堂は安永6年(1777)再建した。

①本 尊 薬師如来、その他開創慧明自筆の位牌がある。また、天正19年(1591)に寺領5石の朱印状を賜った。

②豆腐地蔵 豆腐好きなお地蔵さん。及川のお寺に居たが近くに豆腐屋がなく豆腐が食べられないので、広沢寺に移ってきた。夢でこのことを知った豆腐屋はこの地蔵を信仰し、毎朝豆腐を奉納した。このため「豆腐地蔵」と呼ばれるようになったという。

(3) 上杉定正・鶴姫の墓

○上杉系図には、定正は広沢寺に葬ったとあるが、今は見当たらない（『風土記稿』）

○しかし、定正・鶴姫の墓と伝えられる五輪塔は、墓地の入口の上段にある。なお、鶴姫は七沢城落城の際、広沢寺裏山で自害したと伝えられ、此を自害沢といい、供養碑がある。

2-2. 愛宕社（広沢寺の守護神）

(1) 由 来

○草 創 天文元年（1532）、愛宕山大権現・道了大権現を広沢寺鎮護神とし奉請することに始まる。その後、1753年天龍護法大善神、秋葉山大権現等の諸善神を合祀し、仏法興隆、防火、旅行安全、夫婦円満等、人々の幸福を祈る神仏混淆の名残を留める。

○社 殿 1790年、1821年、1855年、1882年に改修・再興される。
現社殿 1988年広沢寺檀徒有志、有縁の人々の浄願なって竣工する。

(2) 愛宕信仰とは、京都市の愛宕山山頂に鎮座する愛宕神社から発祥した「火防の神」を祀る神道の信仰である。愛宕神社は全国に約1000社あるという。
愛宕の神は、「迦具土神」で記紀神話ではイザナギ・イザナミ二尊の子。火伏の神としてだけでなく、武神としての信仰もあった。

(3) 愛宕社の道祖神は、船形光背型双体像で、嘉永年間(1848~53)の建立である。ここには道祖信仰に関連の強いと思われる石造物(男根と女陰を象ったと思われる二点)が、以前は堂内に祀れていたというが現在は所在不明となってしまった。

3. 七沢・うつむき地蔵 [伝 元文2年(1737)]

○この地蔵は、現在は大沢に架かる二の橋の右袂にある。元は橋の向こう左側にあったが昭和40年の河川改修の際に現在地に移された。

○江戸時代中期頃から、信州高遠の多数の石工が、七沢の石切場で働いていた。伝承によると元文2年(1737)、親方が弟子に地蔵を造らせたところ、地蔵の鼻を欠いてしまったので造り返させたが、出来上がった地蔵は申し訳ないという気持ちを現してか下向きになってしまったという。このため誰いうとなく「うつむき地蔵」と呼ばれるようになった。

4. 七沢・観音谷戸の道祖神、他 七沢1808付近

①船形光背像四体の内二体には年記がある[文政7年(1824)と安政5年(1858)]
安政5年の像は僧形を表現したものだが、地元では「おかめ」顔の道祖神として信仰している人もいるという。なお、一体道祖神は、打ち欠けている
他にも男根形の石造物二個、繭玉形の石造物、中世石造物や石の祠もある。もう一つ、平成4年新立の双体道祖神がある。

②上部に不動座像浮彫の角柱兼道標 (七沢1806) 徳雲寺前
(塔身正面) 大山不動尊 (右面) 此方浅間山ミチ (左面) 此方七沢温泉ミチ
(裏面) 明治三十七年一月 高座郡大沢村下九沢 施主 梶原友造 荻山鉄松

③地神塔(角柱)兼道標 (七沢1806) 徳雲寺前

○(塔身右面) 左せんげんミチ (正面) 地神塔 (左面) 右かわんおん道
○地神塔は十二天の一つ地天のことで、大地を象徴する神とされる。農業の神として春秋彼岸の社日(穀稼の最も近い日)に主に地縁集団を単位に地神塔等を礼拝対象として祀る。
○荻野の枅割りには、類例の少ない5面体の地神塔(角柱)がある(天照大神他5神)。

5. 七沢・徳雲寺(吉祥山徳雲寺 臨濟宗鎌倉建長寺末寺)

(1) 由緒・歴史

①開山 妙覚禪師(建長寺31世) 文和4年(1355)没。
②中興開山 謂雲和尚 応永15年(1408)上杉持貞が建立で、妙覚禪師の嗣法を受け謂雲和尚が中興したという(持貞は定正の叔父で8代当主の持定か)。
③現本堂等 明治初年の神仏分離により衰退したが、昭和52年に檀徒13人により現本堂が新築された。又、戦乱期の七沢城落城の際の兵火により、寺宝や古文書は現存しない。

(2) 伝上杉定正公墓

○本堂裏手には、上杉定正の墓と伝えられる宝篋印塔・五輪塔などがあったが、現在は本堂前に公墓が建られている。位牌堂には、上杉持貞の位牌が安置されている。
○山王社(上杉氏の七沢城鎮護四社の一つ)の「別当長尾正経之墓」がある。
○本尊 正観音又は薬師衲機仏 虚空蔵付五輪塔 (『風土記稿』)

○徳雲寺は七沢字上の窪(七沢城跡北側の台地の中段)にある。この付近は、「御屋敷」(武士や兵士の長屋)や「検校屋敷」(定正の妻鶴姫や役人の屋敷)があったという伝承の地で、在城武士の墓碑や供養塔と推測される碑が多くある。

○万霊塔 安永7年(1778) 伊藤新八(信州高遠石工)~高遠の石工は多くの石造物を作ったが絵師・仏師・刀鍛冶と異なり名前を彫ってある事例は少く、名前が残っているのは40人と限られた石工であるという(『厚木の石仏と高遠石工の足跡』 澤田五十二)。

6. 七沢・門口の道祖神他（七沢1435付近）

- ①県道伊勢原津久井線から七沢温泉に向う道が分岐する付近が門口と呼ばれる集落である。ここは、「七沢城大手門への入口」であったところから現在も「門口」と呼ばれている。
- ②道祖神は、船形光背単身像二体と中世の宝篋印塔の一部が置かれている。
 - 一方の像には、文化5年(1808)の年号と下七沢の建立者の氏名がある(江戸町七沢上下二村に分村)。
 - もう一方の像は、市域には例の少ない座像である。像は上端が欠け、名文全体は不明。左肩の「五乙亥天」から宝暦5年(1855)の建立と推測される。右肩には「□道六神」とある。道六神・道陸神は道祖神と同じものである。□の字は上にもう一字あると推測し、「奉納」であるという説もある。

7. 七沢城址（シロヤマ）

- ①築城時期・地形・場所について、『風土記稿』には「村の中程にあり、中古は山林なりしに今は白田(木刈(なつた田、畑)を開けたり潤(うる)六百坪 大手口の蹟は当方にあり空甕り蹟彷彿たり築城の始を伝えず(略)」とあるように七沢城の築城時期・築城者は不明である。

自然の山を利用した山城で、戦国の末期に後北条の攻撃にあい落城し、そのままの状態であった。近世の城郭とは違い中の建物も粗末なものであったという。城址の中心には現在七沢リハビリテーション病院が建設され、敷地内には七沢城址之碑が建っている。

- ②七沢城址之碑（横幅202cm、高さ140cmの根府川石の碑。平成13年3月 厚木らしさの創造推進事業玉川地区協議会の建立）

七沢城は宝暦2年(1450)に最初の記録がある。その後上杉定正の城となり、兄朝昌が城を守った。16世紀中頃に小田原北条氏によって落城し、それ以来城址は農地になったという。

- ③初めて文献に登場する七沢城に関する記述（『鎌倉大草紙』）

○宝徳2年(1450)、関東公方・足利成氏の近臣たちと関東官領山内・上杉憲忠の重臣たちの間に争いが起こる。上杉方に攻められた成氏は、一旦江ノ島に逃れるが、七里ヶ浜の合戦で上杉方は敗退し、憲忠は七沢山に要害を構えた。これを「江ノ島合戦」という。成氏は、この年の5月にこの合戦の経過などを記した書状を室町幕府に差し出した。これが『鎌倉大草紙』である。これは、康暦2年(1380)～文明11年(1479)の鎌倉・古河公方を中心とした関東地方の歴史を記した書である。

○同年10月室町幕府の執り成しで和睦が成立し、憲忠は七沢城から山内上杉館へ帰参し、その後、扇谷上杉定正がこの地方を領し、定正の兄朝昌が七沢城主となった。

- ④扇谷、山内両上杉氏の対立から実蒔原合戦へ

○文明18年(1486)、扇谷上杉定正が家宰太田道灌の実力(常に足軽3000騎を領し、少數の親類による弓馬戦を主とした遊撃戦を編み出した)を恐れ、加えて山内顯定の讒言(ざんげん)もあり、主君上杉定正に粕屋館(伊勢原市上粕屋)で謀殺された。死に際し道灌は、「当方滅亡」と叫んだという。これを機に、扇谷・山内両上杉氏の対立が激化した。

○長享2年(1488)山内上杉^{あきさだ}顯定が、当時扇谷上杉氏の所有していた七沢城方面に來襲する。扇谷上杉定正は、川越から一昼夜で駆け付け、七沢城付近の南実蒔原において地の利もあり少数の兵で顯定の大軍を破り、奇跡的な勝利を挙げた。これが実蒔原の合戦である。この時、定正側にも大きな痛手が生じ、何らかの手落ちで七沢城が落城したかのような記述が山内上杉側の感状(かんじょう)に残っている。一説には、この時の七沢城主である七沢朝昌が戦死したとも伝えられている。

- ⑤実蒔原合戦後の七沢城と落城

○七沢城は、朝昌の後に子の朝寧が、更にその後は弟の憲勝が次いで継いで七沢七郎を称したと伝えられている。

○七沢城が最終的に放棄された時期については、はっきり分かっていないが、小田原北条氏がこの地域を制圧した16世紀半ばではないかと推測される。

⑥七沢城縁の地名 七沢城跡周辺には門口、春米、お蔵など数々の七沢城に縁の地名がある。

⑦時代背景 室町時代の関東は、足利将軍家の子弟が鎌倉公方となり、関東管領の上杉氏がこれを補佐する形で統治されることになった。代々の公方は、しばしば自ら京の将軍職奪取の野心を抱いたり、補佐役・目付役である管領とも対立していた。また、京都を中心に応仁の乱〔応仁元年(1467)～文明9年(1477)〕が起き下克上の混乱した時代であった。

8. 夕焼小焼の碑・和田傳文学碑(元湯玉川館敷地内)～現当主の山本淳一氏の説明文他

(1) 夕焼小焼の碑(中村雨紅)

○中村雨紅(本稿略) 明治30年(1897)現八王子市恩方生まれ。詩人・童謡作家。
現東京学芸大卒後、日暮里第二小教師。昭和元年12月厚木実家高女(現厚木東高)に赴任。以来昭和45年5月8日75才で亡くなるまでの46年間、厚木に在住した。

○雨紅と元湯玉川館 厚木を第二の故郷として移り住んだ雨紅は、この厚木で夕焼小焼の里を探し求めて歩いたという。ある日、七沢を訪れふと立ち寄った玉川館で出迎えたのが教え子で玉川館を営む山本茂子さん(現当主淳一氏の母)であった。以来、家族ぐるみの付き合いが始まったという。

○夕焼け子焼の碑 ある時雨紅が「八王子や信州などには碑があるんだが、神奈川にはないんだよね」と話したのが切掛けで先代ご夫妻が尽力して昭和37年11月27日に碑が完成したという(現当主の山本淳一氏の説明文より)。

(2) 和田傳文学碑

○和田傳^{つとむ} 明治33年(1900)現在の厚木市恩名の名主の家に生まれる。早大仏文科卒。
日本農民文学の第一人者で、厚木市名誉市民。
代表作は、『大日向村』『日本農人伝』『鰯雲』『風の道』『門と倉』などがある。
特に『鰯雲』は映画化され、淡島千景、木村功が主演で評判を呼んだ。

○和田傳と元湯玉川館 玉川館は、和田傳が幼い頃から祖父に連れられ湯治に行っていた馴染みの温泉宿であった。また、玉川館の先代ご夫妻、現当主夫妻ともに和田傳の愛読者でありファンで親交があったことから、昭和55年、傳の80才を祝ってこの文学碑が建られたという(現当主の山本淳一氏の説明文より)。

○文学碑

平野寂しけれど	母のふところぞと
人みな美しく	やすらい
山の稜線に	原初の心を失はず
父の肩を見て	ゆたかに慎ましく
勇みたち	住みてあり
山の狭間を	和田 傳

9. 村中山 福聚院 観音寺(天台宗) (風土記稿・観音寺作成説明書他)、

- ①創 建 奈良時代後期の元正天皇在位715～723年(伝)～野火によりすべて焼失
②中興開山 元禄7年(1694)浄苑願寺(伊勢原市)木食空誓阿上人
③本 尊 馬頭観世音菩薩(688) ⇨ 七沢城主上杉定正の愛馬「月影」を供養した事による
④その他 「其餘阿弥陀」(688作)、「勢至菩薩」「仁王像」(688作)、「不動明王」(688作)
⑤絵 馬 41点の絵馬が確認(昭和54年調査)、うち馬を描いたもの25例ある。本尊が馬頭観世音菩薩であり、当寺が馬の安全と供養を兼ねた信仰を集めていたことを示している。
大正期までは、毎年3月18日に境内傍らの鉄砲馬場で競馬を催し、祭りを行っていた。

⑥宇賀神像(人頭蛇神)享保七年(1722) 長七郎他八名(688作)

宇賀神(宇迦之御霊)の「ウカ」は、「ヌカ」と共に蛇の古語の一つであった。古代から蛇は、力強く俊敏な動きと「脱皮」に見られる生命力から畏敬され、信仰の対象とされてきた。その後も蛇は、山の神・水神・農耕神・繁栄・死霊の象徴として畏敬されてきた。七沢では宇賀神は主に水神として祭祀されたようである(近くの大釜弁才天は雨乞のシンボル)。

- ⑦水 鉢 正徳二年(1712) 忠兵衛他七名(鰐淵五郎)～銘があるものの中では妙昌寺の題目塔〔宝永7年(1710)甚助〕に次いで古い(以前高遠教育委員会の調査あったと言う)。

10. 小林多喜二逗留地(福元館)

○小林多喜二 明治36年(1903)現大館市生まれ、日本のプロレタリア文学の代表的作家、小説家。小樽高商卒後日本銀行小樽支店に勤務。労働運動、社会主義思想に接近し昭和4年代代表作『蟹工船』を執筆。昭和8年(1933)に特高警察の拷問により虐殺された。享年29才。

○小林多喜二と福元館離れ 多喜二は昭和6年3月から約1ヵ月間、福元館の離れに逗留して小説『オルグ』を執筆した。離れは殆ど多喜二逗留時のままの姿で保存されている。多喜二の逗留は極秘であったためか、外部に一切漏れることはなく、公になったのは、実に逗留から約69年後の平成12年(2000)のことであった。福元館の代々の館主は、当時の厳しい思想弾圧の中で危険を覚悟で多喜二の逗留を引受け、口外せず、離れを守り続けた。

11. 七沢神社遙拝所(ハチマツノ)は、鐘ヶ嶽の直ぐ下にある七沢神社(鰐淵社)が遠方で急坂のため、容易に参拝出来るよう、八幡社跡地に神楽殿兼用の建物が建られた〔明治37年(1904)〕。

①八幡社は、『風土記稿』に「是も村の鎮守なり、上杉修理大夫定正勸請の棟札あれど文字慢減す。按ずるに、山王社傳に云る、上杉氏が七沢城鎮護四社(東・山王社、西・白山社、南・八幡社、北・諏訪社)の一つなるべし 永禄十年(1567)三月中村玄蕃、同源太郎等子孫今村民にあり 願主として再建す、その棟札今に存す(以下略)」とある。

②鐘ヶ嶽山頂にある七沢神社(元浅間神社) 鐘ヶ嶽は、戦国時代、上杉定正の持城七沢城の見張りの山として、事あるごとに山頂の鐘で報じたという伝承がある。この鐘ヶ嶽は尾張・徳川家の信仰が厚く、元禄元年(1688)から四年に浅間神社と別当禅法寺などが再興された。浅間神社は、旧七沢村の鎮守八幡社と山王社を合祀し七沢神社と改称し、村社となった。

12. 七沢老人憩いの家 事務連絡・食事・トイレ

13. 庚申塔(角柱)兼道標 (七沢郵便局通、七沢796) ～解散 バス停へ
(塔身正面) 庚申塔 (右面) 右ひ奈多 一のさ壬 左大山 いせはら
(左面) 寛政十二年(1800) 七沢 門口

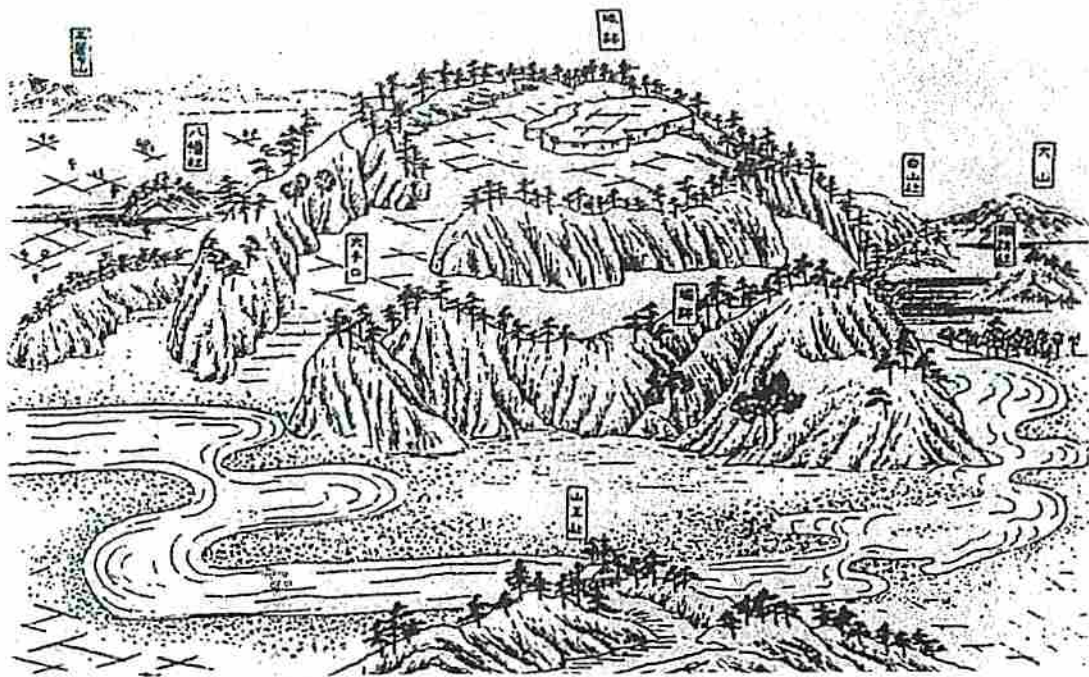
【参考】金井古墳

(1) 古墳の概要(『神奈川の古墳散歩』)

- 1号墳 玉川保育所の所にあったが既に消滅。円墳(石室長5・8m、高さ2・4m)。奥壁は巨石。直刀・金環・丸玉・鉄鏃など出土。
- 2号墳 玉川小学校の今の校庭の真ん中にあったが消滅。1号墳の100m南。円墳(径は30m程、石室長10m、高さ2・3m) 玉類出土。
- 羨門・奥壁・天上石に巨石が用いられ、この地区において有数の規模を誇る。小学校の校庭北隅に巨石が配置され、古墳があったことを記念している(村内に四十数基の古墳)。

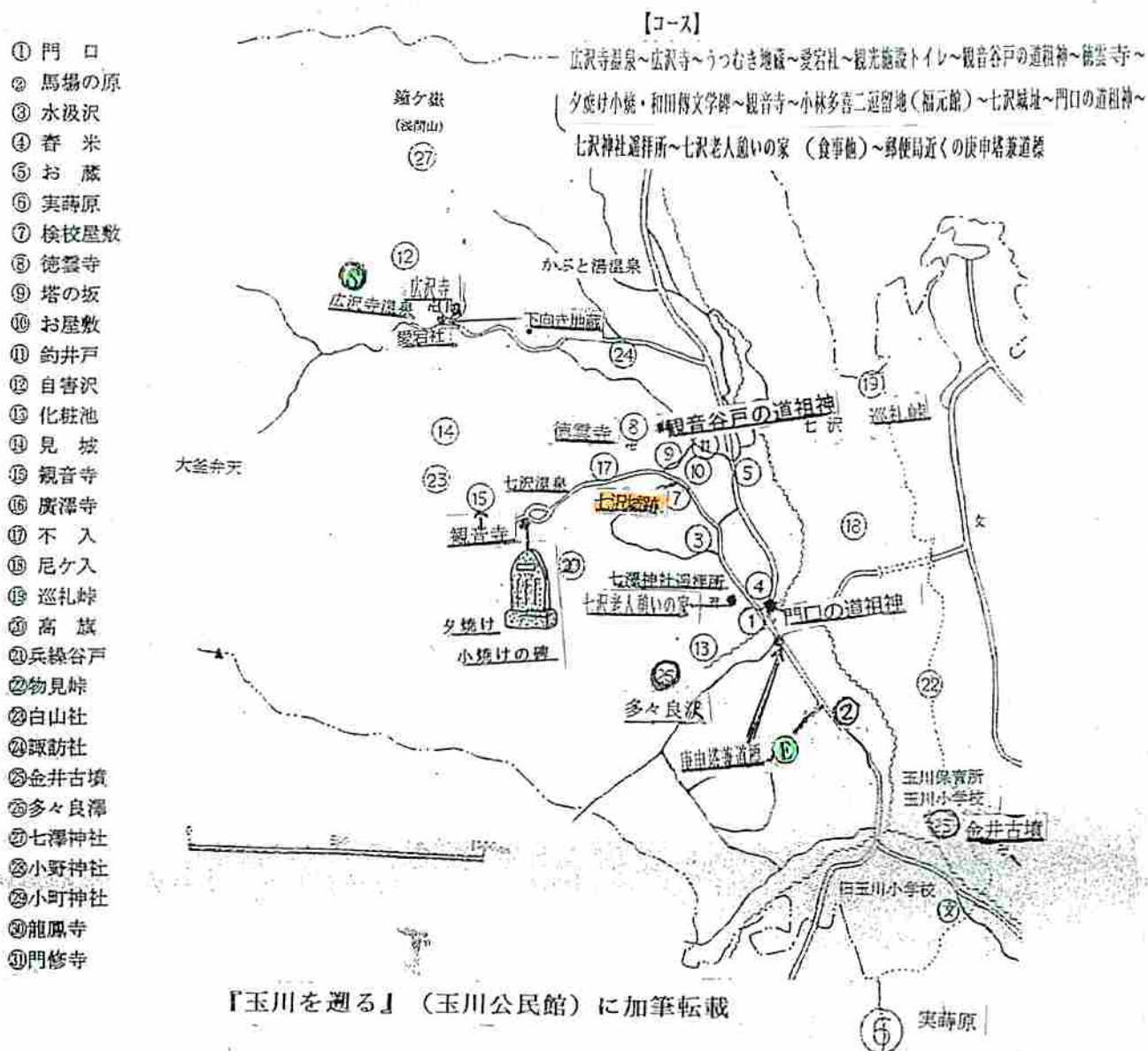
(2) 「金井」の地名の由来(『風土記稿』、『厚木市史近世資料編(4)村落2』他)

- 現在の七沢字「金井」と呼ばれる地域は、『風土記稿』(天保12年(1841))では七沢村小名「金目」と表記されているが、『七沢地誌略』(明治21年(1888))では「金井」と表記されている。しかし、『厚木市史』の寛文5年(1665)の『下七沢検地帳』(抄録)の解説によると「本資料坪の名請人の所在地名が小野境金井目・・・」と記されている。従って「金井の地名」は、江戸時代前期には金井目、後期に金目、そして明治中期に金井と表記されている。金井目が二字に短縮されて金目、金井と表記されたものであろうか。
- 平塚市南金目については、『風土記稿』南金目村の項に「和名抄(931~38)には餘綾郡郷名に金目と載たるは則此地なるべし」と記されているが、地元では、昔から「かなめ」と言わず「かなひ」と言ったといわれている。
- 「金目」の意味は、諸説あるが一般には「鍛冶関係の川沿いの集落」を意味する(「かな」は鍛冶関係の土地を、「め」は川沿いの集落)。また、「かなひ」は、「金樋」すなわち川の水の取入口を意味するという説もある。



七沢城跡図(『新編相模国風土記稿』)

歴史散策コース・七沢城緑の地名図



【参 考】

1. 七沢村の概要（『厚木の地名』、『玉川の石造物探索』、『厚木市史中世』）

（1）地 理・沿 革

◎市域の西部に位置し旧村域は、市内最大の面積。大山山地・白山丘陵がその殆どを占める。村域東南側には、七沢盆地や日向台地がある。周囲の山地からは幾筋もの小河川が流れ、これらが集まった玉川が盆地東側を流れ、伊勢原市側からの日向川と東南端で合流している。

○川に沿って津久井道が村域を南北に通じ（東西に巡礼道）、東側は小野村・上古沢村、南側は大住郡日向村（日向村）、北側は煤が谷村（煤が谷村）に接し、最西端は大山山頂にいたる。

◎至徳4年(1387)の文書（『甲州塩山向岳庵開山抜隊和尚行実』）の相州七沢が初見があるがその後七沢の城に関連した資料や役帳並びに絵図などから、七沢村の沿革が推測される。

- ・宝徳2年(1450) 相州七沢山・七沢の城（『鎌倉草子』（鎌倉草子））
- ・宝徳3年(1451) 相州愛甲保七沢村（「休庵寺領注文」（休庵寺領注文））
- ・長享2年(1488) 七沢要害（『常泰上杉房定書状』）、七沢之城（『上杉定正書状写』）
- ・永録2年(1559) 中郡七沢（中郡七沢）、天正10年(1582) 愛甲郡於奈良沢郷（愛甲郡於奈良沢郷）
- ・近世の国絵図 正保図、天保図～「七沢村」、元禄図～「上七沢・下七沢」2村

◎近世の支配 元禄期までは幕府直轄領、以後は旗本2給地。明治22年(1889)、岡津古村、小野村と合併して玉川村大字七沢となり、昭和30年の合併により厚木市大字七沢となる。

◎村名の由来 『風土記稿』に「村内に七ツの沢あるを以村名起れりと云」と記され、「南沢大沢、藍沢、吉原沢、奈加沢、みづく沢、たたら沢」をその起源としている。

（3）旧集落・土地利用・産物

○『風土記稿』に小名として「南沢、大沢、藍沢、吉原沢、奈加沢、みづく沢、たたら沢、大竹、金目（現在金井）、以下略」の18の集落が記されている。

○幕末の戸数は155戸（『風土記稿』）、明治初期は172戸（『皇国地誌』）である。

◎山地が9割余、田畑は少ない。山地での生産物は、材木、薪炭、七沢石などである。

○石切場は、北西部の山中の字奥半谷と大平にあり、江戸時代前期には七沢石を使用した作例が散見される。信州高遠の石工の出稼が知られる中期以降、七沢石の作例は増大し、以降現在まで高遠石工の系譜は続いている。

○高遠石工は、信州高遠からの出稼ぎであった。内藤治世下の高遠藩(3万3千石)は、小藩ながら譜代大名で幕命による出費も多く、常に財政難であった。このため高遠藩は石工などの出稼ぎを奨励し、その稼ぎ高に課す税（運上金）の徴収が目的であった。

2. 道祖神（『神道辞典』（註） 他）

（1）道祖神とは 集落の外部から侵入してくる疫病や災害等をもたらす邪霊・悪神を防ぐために村界や辻に祀れる神で、その形から良縁・出産・夫婦円満の神としても信仰を集めた。

①塞さいの神、道陸どうりく神、岐よな神、石神などと呼ばれ、神体は陰陽石や丸石、男女二体の石像のこともある。正月十四日、悪疫除け・五穀豊穡を祈る道祖神の祭り（どんど）が行われる

②『法華験記』（法華験記）には、道祖神が現れる説話が収められており、ここでは道祖神がサエノカミと呼ばれる。本来は、疫病を流行らせる行厄神を防ぐのが役目である。

③記紀神話には、岐神よなの元の名は来名戸之祖神くまどのさののかみ〔ここから来るなという神（塞ぎの神）〕といわれ、近世では道（ミチ）の分岐点ぶんぎに立てられた道祖神（石神）〕であると記されている。

- ④サエノカミが道祖神と表記されたのは、『和名類聚抄』（931~38）に「道祖。風俗通に云く共工氏の子、遠遊を好む、故にその死後、祀りて以て祖神となす。佐部之加美（さへのかみ）」とあるように、中国の旅の安全を祈願する行路の神、道祖に重ね合わせたと考えられる。

(2) 厚本市域の道祖神（『あつぎの道祖神』厚本市文化財協会他）

- ①道祖神を祀る地点は184か所、合計411点〔地点数は江戸時代以来の旧村における集落（集団）という単位で道祖神を祀っていたととらえる事ができる、また、411点には、角柱95、船形後背型90、自然石28、加工型29、中世石造物94、形象石造物51、その他24を含む〕。

【祀る地点数ベスト3】 ①睦合34、②南毛利28、③荻野27・・・⑤玉川22

【道祖神数 ベスト3】 ①小站74、②玉川67 ③南毛利62・・・④睦合55

()内 船形後背型 (13) (28) (16) (7)

- ②サエノカミ（道祖神）に対する信仰は、中世にさかのぼる事が推測されが、石造物という形で確認出来るのは18世紀に入ってからである。

- ③18世紀前半に作られた道祖神の多くは船形後背型で、双体又は単身の彫像を施したものでこの型の道祖神は、概ね江戸期を以て作られなくなる（18世紀後半には、角柱型の道祖神が作られ以降の碑型の中心）。なお、双体道祖神は中部・関東地方のに多く分布している。

※①長野県（鑑数2600）、②群馬県（鑑数2300）、③神奈川県（鑑数1300）〔日本の石仏、57号（1995）〕

【県内】①小田原198 ②秦野182 ③平塚92 厚木81 伊勢原66

『相模の道祖神』平塚博物館 浜野達也（2006. 2. 25）

3. 上杉氏（『日本史諸家系図人名辞典』、『厚本市史・中世』他）

- ①藤原北家、勧修寺流の流れを汲み、鎌倉時代までは京都の中流貴族の家柄であった。勧修寺高藤13代の家祖重房の代に至って丹波国何鹿郡上杉庄（京都府宇治市上杉）を領して、上杉氏を称した。重房は、建長4年（1252）宗尊親王の鎌倉幕府6代将軍就任に従って鎌倉へ下向し武家（軍輔）になった。将軍は、以降9代まで親王が勤め、実権は北条氏（執権）が握った。

- ②上杉氏は、重房の子頼重の娘清子が足利貞氏の室となり、尊氏・直義兄弟を生んだことから足利氏と密接な関係をもつようになった。尊氏が次男基氏を鎌倉公方（鎌倉府の長官として関東を支配した足利氏の称）任じた時、執事として頼重の孫憲顕（頼重）が鎌倉に下向。

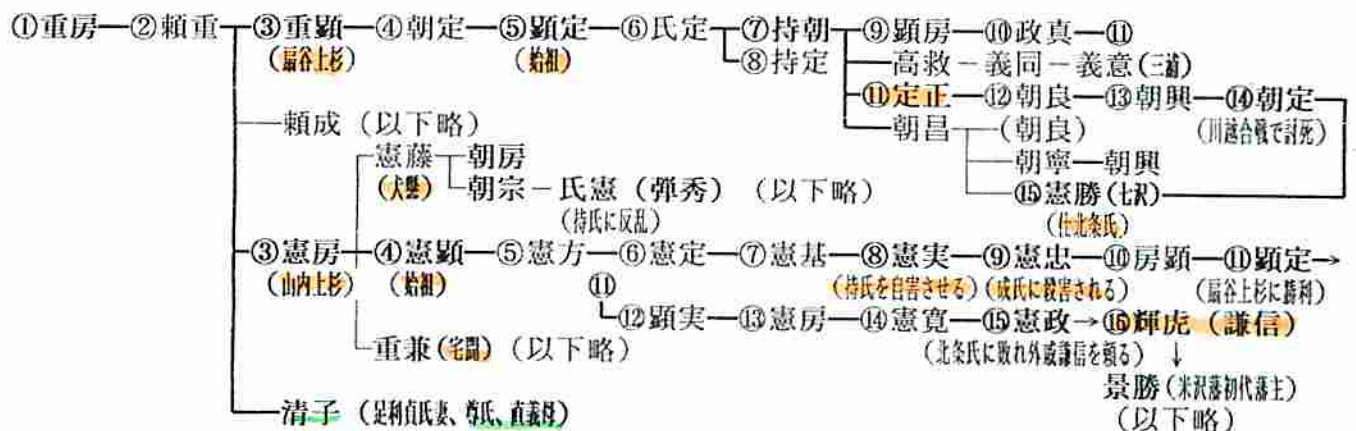
貞治2年（1363）、関東管領（鎌倉公方を補佐するため、関東の政務を総管理する室町幕府の職名）に補せられ、以降上杉氏がこの職を世襲することになった。

- ③鎌倉（関東）公方は、①基氏、②氏満、③満兼、④持氏、⑤成氏、⑥政知の六代続いたが、この間京都の足利幕府幕府との対立や、後には関東管領上杉氏との確執も生じた。

- ④上杉氏は、やがて四家に分かれ、それぞれ鎌倉の屋敷所在地の地名をとって山内上杉・扇谷上杉・犬懸上杉・宅間上杉と呼ばれた。実際には山内上杉家が総家として勢力を持っていた。

- ⑤上杉定正（嘉吉3年（1443）生誕、明応3年（1494）52才） 実蒔原合戦の勝利から7年後、北条早雲と手を結び対立していた上杉顕定を攻める途中に落馬し急死。

4. 上杉氏系図（『日本史年表・地図』、『厚本市史・中世』他）



日暮里の小学校での勤務を終えると、高井宮吉先生(中村雨紅先生)は八王子からバスで思方へ帰る。バスを降りるといっぺんに静寂な世界に変わり、澄んだ空気を腹いっぱい吸い込む……夕焼けがうすらと谷戸を染め、どこからともなく時を告げる鐘がなる……雨紅先生はその場でノートに情景を記した。

大正12年7月の関東大震災で、作品を綴ったノートの大半を焼失したが、焼け残った13部のなかに「夕焼小焼」があった。後日、草川信先生により曲がつけられ、多くの人に親しまれ今に歌い継がれている。

大正14年、厚木実科高等女学校(現在の厚木東高等学校)に赴任された雨紅先生は、故郷思方の風景を付近に求め、休みのたびに夫人と歩いた。七沢のこの谷戸を上ってくると徐々に、あの頃の思方が蘇ってくるのを憶え、しばしば足を運ばれるようになった。ある時、ふと立ち寄った宿(元湯玉川館)で出迎えたのが、嫁いで間もない女学校の教え子、茂子(母)であった。以来、家族ぐるみのお付き合いが始まった。

ある時「八王子や草川さんの信州などには碑があるんだが、神奈川にはないんだよね……」と話されたのを聞いて、両親は碑の建立を決めた。すぐに準備に入り、建てる位置も雨紅先生が庭内にお決めになった。石は七沢の石工・朝生俊雄氏の選りすぐりの月光石。石工は「夕焼け小焼のあとにはお月さんが出るんだからこの石にしたよ」と、相変わらずのひょうきんぶりだが「この硬い石を壊すのは拓本だよ。拓本だけは絶対にだめだよ」とも教えていただいた。コチコチと手彫り作業の合間、手を休めた際には「字は力が入っているところは深く、細いところは優しく彫る。そうすると雨紅先生の心になってきて、いつまでも生き続けるんだ。石も字も」。再びメガネを掛け、石に顔を寄せてコチコチと続けた。

雨紅先生は夕焼けのもと、家路につく子どもの絵とカラスを描かれた。しかしカラスの絵だけが未完成だった。父が催促に行くとたくさん描かれたのはどうみても「カモメ」ばかり。二人は顔を見合わせ大笑いしたようだ。そこで妙案が浮かんだ。当時、玉川中学校の杉山勇教頭先生は絵が得意。すぐに頼んでみよと宿直当番だった教頭先生に頼み、「カラス」が誕生。みごと昭和37年11月27日に碑は完成した。

雨紅先生は夕焼けに強い執着がおありのようで、お住まいの厚木からはいつも西の方向に夕焼けを望んでおられたのか、「いま、夕焼けがきれいだね」とよく電話をくださいました。砂利道にスバル360を飛ばし30分程でお迎えに行くと、外で奥様と待っておられる。七沢に着く頃には宵待ちですが、ご夫婦で碑の前でしばし佇んでおられたのです。雨紅先生の至福の時であったに違いありません。

晩年、雨紅先生の入院する県立厚木病院(現 厚木市立病院)に両親が訪ねると「面会謝絶」であった。偶然、病室から出てこられた奥様のお心遣いでお目にかかることができた。大山の嶺に夕日を見ることができ西側の病室だ。こちらの話しにうなづいているようにも見えた。

眼前に聳える大山に、きっと夕焼けの思方の憧憬が映っていたことでしょう。
昭和45年 75歳にてご逝去。

平成16年11月12日(金)あつぎ観光ボランティア研修講座にあたり思い出を綴らせていただきました。

七沢温泉 元湯玉川館 山本淳一

夕焼小焼

夕焼小焼で

日が暮れて

山のお寺の

鐘がなる

おてつないで

皆帰ろう

からすと一緒に

かえりましょう

中村雨紅

平野 寂しけれど
人みな美しく
山の稜線に
父の肩を見
母のふところ
やすらい
原初の心失
ゆたかに慎ま
住みてあり
和田 傳

農民文学作家 和田 傳先生 の詩碑建立

経済の急成長は、農村の風景や、生活の様相を大きく変えた。農地は売買され、色とりどりの家や倉庫が建ち、広い道路が走る、農家は重機で壊され、近代住宅に生まれ変わる。人々の暮らしは豊かに、便利になった。

しかし、永きにわたって培われた原風景も、農に育まれた人間性や心までもが、どんどん失われていった。

傳先生は、しばしば槌音から逃げるように、宿を訪ねられた、そして先生のファンであった父とは、辺りの変わりようを惜しむかのように、語り合っていたのを 覚えている。宿の前の山越しに想いを馳せ、すこし以前の農村の様子から、時をさかのぼってまでを、確かめては心に深く刻みこんでいるかのように思えた。

そんな事が幾度あったろうか、父は傳先生の心中ままならぬものを察し、「傳先生の想いを碑に残す」ことを決めた。昭和54年晩春。

ある雨の日、傳先生と父と私は、七沢の石工の案内で、真鶴に出向き、傳先生はたくさん石の中から、この石(小松石)を選ばれた。七沢は七沢石の産地で石工が多く、旧知の井上 均氏には敢えて、手彫りでやっていただくよう、依頼した。

刻文には、傳先生の作品の一節を、とお願いしたのですが、もったいないくらいにすばらしい詩を頂戴できた。出逢いの第一印象を父は、「心の宝になる詩、これからの時代に、多くの人に読んでもらいたい詩…」と感慨深げに見入っていた。傳先生は時折石工の井上さんの仕事場を訪れて、しゃがみこんでは仕事ぶりを見て、出来上がりを楽しみにしておられたようだ。昭和54年の秋、完成した。お披露目は桜の頃に、とのご希望で、昭和55年4月9日、福田清人先生や小島すみ先生など傳先生ゆかりの方々をお招きして、除幕披露を行うことができた。

碑の建立について、傳先生は厚木市立図書館蔵書1「和田 傳 生涯と文学」の中で、「…五十五年(一九八〇年)、私の八〇歳を祝って七沢温泉の元湯玉川館に私の文学碑が建てられた。あるじの山本鉤二・茂子夫人、若主人淳一・美喜子夫人とも私には処女作いらいの愛読者でありファンであったが、私にも元湯は幼いころから祖父に連れられ、学童のころは父か母に連れられて湯治に行っていた馴染みの温泉宿である。そう言えばこのむかしの湯治場の情緒をいまでもさながらに残すこの元湯は、創業の徳川末期くらい客も三代目、四代目、あるじも三〜四代目という平野の農民とは深いえにしの宿である。その前庭に真鶴産の小松石の文学碑をあるじ父子が建ててくれたのである…」と著されている。

和田 傳生誕100周年(平成12年)にあたって、傳先生を偲び、記憶のままを記述しました。

七沢温泉 元湯玉川館 山 本 淳 一

和田 傳

平野 寂しけれど
人みな美しく
山の稜線に
父の肩を見て
勇みたち
山の狭間を
母のふところぞと
やすらい
原初の心失はず
ゆたかに慎ましく
住みてあり